

学校目標・経営方針	◎自己の可能性を信じ、何事にも主体的にチャレンジする生徒の育成 ◎広い視野をもち、地域社会の形成にすすんで参画できる生徒の育成
-----------	--

本年度の重点目標	1. 魅力ある授業の工夫をとおして、学習意欲の向上と確かな学力の定着をはかる。	達成度 A ほぼ達成できた。(8割以上) B 概ね達成できた。(6割以上) C 不十分である。(4割以上) D 達成できなかった。(4割未満)
	2. 日々の教育活動をとおして、良好な人間関係と規範意識の醸成をはかる。	
	3. 生徒個々の希望と適性に応じた進路の実現をはかる。	
	4. 笛吹市との包括連携等を活かして、地域課題に取り組む意識と行動力を育てる。	
	5. 教職員の多忙化改善に向けた取り組みを行う。	

評価	4 良くできている。
	3 できている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

本年度の重点目標			自己評価			
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	年度末評価(令和8年2月1日現在)		
				自己評価結果		
				達成度		
				成果と次年度への課題・改善策		
1	生徒への教育の質を保證する(生徒理解に努めながら学習意欲の向上と確かな学力の定着をはかり、魅力ある授業づくりに向けた授業改善の工夫)	◎学び続ける教員による授業の充実を図る ・山梨スタンダードに基づいた授業実践により「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善に取り組む。(ICTの利活用を行う) ・相互授業参観や授業研究、教員研修を通して、教員の授業力向上に努める。 ・やまなし教員育成指標に基づき常に学び続けることを意識し、自己研鑽に努める。  ◎生徒の家庭学習の推進を図る ・生徒が自己の生活を見つめ、主体的に家庭学習に取り組むことができるよう、ICT学習支援ツールと今未来手帳の活用に取り組む。  ◎個別最適な学びと協働的な学びの実現を図る ・教科横断型STEAM型の新教科を設定し、生徒に言語能力、問題発見・解決能力など学習の基盤となる資質・能力を育成することを目指す。 ・DXハイスクールの事業を生かして、個別学習や協働学習を通して情報活用能力を高める。 ・4学科の特徴を生かし、生徒一人一人に応じた学びが実現できる教材やカリキュラム開発を行う。	・授業アンケート ・ICTの活用状況  ・BLEND、Teams、Classi、今未来手帳の活用状況  ・相互授業参観の状況 ・カリキュラムデザインの進捗状況	○生徒の授業アンケート結果において、「自ら学習課題や学習方法を選択して自主的、自発的に学習に取り組むことができた。」という質問に対して、肯定的な意見が92%「授業の中で課題解決に向けて自分から取り組んでいる」という質問に対して、肯定的な意見が90.0%と、自ら学習方法を選択し、課題解決に向けて主体的に取り組んでいる様子が読み取れた。 ○「ICTを活用し情報活用能力育成などにつながる授業が行われていいますか」という質問に対し、生徒の肯定的な意見が79.3%と、約8割に達しており、多くの生徒がICTを活用した授業を通して、情報を主体的に扱う力が育まれていると感じていることがうかがえる。 ○DXハイスクール事業を活用し、個別学習や協働学習の充実を図り、情報活用能力の向上を目指して、生成AIやデータサイエンスなどに関する講演を外部講師を招いて実施した。その結果、生徒は最新のデジタル技術に触れながら、情報を批判的に捉え、目的に応じて活用する意識を高めることができ、学習への意欲や主体性の向上につながった。 ○相互授業参観については、1学期・2学期と年に2回の期間を設けているが、達成率は6割であった。 ○「笛吹グローバル」は3年生は1単位で今年度はじめての実践となった。生成AIを活用しWebページの作成をするなど、カリキュラム開発をした。特に対話と協働を重視し、生徒が所属する4学科それぞれの特色が際立つよう工夫した。	B	○授業において生徒の主体性を重視した学習活動が一定程度定着し、探究的な学びや自己調整的な学習の成果が表れていると評価できる。一方で、主体的な学びが十分に実感できていない生徒も一定数見られることから、次年度はICTの活用や協働的な学習活動をさらに充実させ、すべての生徒が自己の学びを自覚し、継続的に課題解決に取り組める授業づくりを進めていきたい。 ○Classi、今未来手帳を廃止し、グロースナビを導入することで、これまで行ってきた振り返りと成果の蓄積を継続するとともに、個別最適な学びやキャリアデザインを支援する学習ツールとしての活用をしていく。 ○校内で参観できる授業を提示したことによって、授業参観しやすい雰囲気作りができたと感じている。一方で、また、自覚的に授業改善を進めているとは言い難い状況がある。 ○校内研修で、研究開発運営指導委員の協力を得て、次期学習指導要領の方向性や、学習評価について理解を深めたので、これをいかに実践につなげたかを検証する必要がある。 ○全ての生徒が主体的に参加できるよう、ファシリテーションの工夫や話し合いの手法(役割分担、ワークシートの活用等)を改善することが課題である。
2	生徒が安心安全な学校生活を送ることができる学習環境をつくる(良好な人間関係と規範意識の醸成を目指した、日常的な教育活動の工夫)	◎いじめの未然防止に努める ・いじめ調査に併せ、生活実態の把握に努め、予防的な指導の充実を図る。  ◎担任、副担任の連携・協力によるホームルーム指導を実施するとともに学校全体で情報共有を図り、組織としての適切な対応に努める ・生徒一人一人が抱える課題に着目し、個性を認め、個別の発達を支援するホームルーム活動を行う。 ・学校全体で情報を共有する体制を整備し、組織的な対応を行う。  ◎生徒の安心安全な学校生活を確保する ・授業、クラブ活動、登下校など学校生活全般における生徒の安心安全を確保する。	・教職員間の情報共有 ・保護者との情報共有と情報発信  ・朝の読書の実施及び道德教材の活用 ・登校指導の実施 ・学年・学科集会など様々な場面での指導  ・学校生活の充実感 ・教育相談の充実 ・危機管理の徹底	○月1回はいじめ対策委員会、週1回の木一会議を通じて、課題を抱えている生徒の情報共有を行い、担任、学年、教育相談等の組織ぐるみでの生徒対応が丁寧に適切に行われている。いじめアンケートに挙がってくる諸課題に関して被害生徒、加害生徒に寄り添った指導配慮が行われ、時間がかかる事案もあるが、改善に向けての指導が継続的になされている。 ○安心・安全な学校づくりのため指導を継続しているが、今後も危機管理の醸成を促すとともに、互いに嫌な思いをしない学級環境づくりを徹底していきたい。 ○全学年で各HRで道德の時間を設け、さらに1学年では外部講師を招聘してストレスマネジメント講演会を行い、ストレスマネジメントの導入をした。生徒からはストレスへの向き合い方が分かったとか、ストレスが悪いものではないことが分かったなどの感想があった。3学期には担任主導のもと、ストレスマネジメントに関わる心身をリラックスするプログラムと、アンガーマネジメントのコントロール方法についての授業をした。 ○本校には、様々な支援を必要とする生徒が在籍しており、職員会議での情報共有や多くの先生方からの声かけ、また、外部支援の活用など、個人の特性に配慮した指導がなされている。	B	○引き続き、全校での情報共有の機会を継続するとともに、平日頃から道德教育を意識した学級経営や行事運営を促し、生徒が安心・安全な学校生活を送ることのできる環境づくりを促したい。 ○次年度も、危機管理マニュアル・点検項目の明確化と、学期ごとの校内研修で危機管理意識を高め、生徒が安心安全な学校生活を送れるよう基盤整備をしたい。 ○支援が必要な生徒が増加する中、教員間での情報共有がさらに必要となる。支援内容の一貫性・継続性が求められるので、学年、学科、分掌で共有する仕組みを強化していきたい。 ○ストレスマネジメントは命の教育の一環であり、周囲との良好な人間関係を築くことも重要である。そのため、心の問題を抱えている生徒に対して、心を健やかに保つためのヒントを伝えていきたい。学校運営協議会の委員に山梨大学の田中教授に加入していただいたので、相談しながら進めていきたい。
3	進路指導を充実させ、生徒の進路実現を図る(各々の適性に応じた進路を実現)	◎少人数授業等編成目標に応じた学習指導を行い、進路実現を図る  ◎生徒、保護者の意向を調査・把握し、進路希望を実現するための具体的な手立てを講じる ・生徒や保護者への情報提供を充実させ、進路意識や目的意識を高める。  ◎課外授業や課外指導の充実を図る ・土曜講座、長期休業課外、小論文講座、各種検定など生徒のニーズに応じた学習機会を設け、積極的な参加を促す。  ◎進路行事や総合的な探究の時間等を通してキャリア教育の体系化を図る ・「総合的な探究の時間」「課題研究」「笛吹グローバル」での探究活動を通して、外部機関等と連携しながら効果的なキャリア教育を行う。	・相互授業参観の状況 ・指導と評価の一体化  ・二者懇談・三者懇談の実施状況 ・各種便り、HP等の充実  ・多様な学習機会の提供	○普通科において少人数の習熟度別授業を展開し、学習内容の定着を図ったことは有効であった。 ○前年度の反省を踏まえ、より実効性のある進路指導を図るため、各学期ごとにCareer Dayを実施し、生徒が自己のキャリア形成に向けて考える機会の充実を図った。 ○学校全体で二者懇談に取り組む体制を整え、担任を中心に生徒一人一人の学習状況や学校生活の様子を丁寧に把握し、個に応じた支援や今後の学習目標の共有につなげた。 ○外部と連携した進路ガイダンスの実施や笛吹市と連携した就職説明会など、自己のキャリア選択につながる多様な学習の機会を増やした。生徒は意欲的に参加し、自らの進路の理解と関心を深めることができた。進路ガイダンスを有効に活用して進路選択につなげていく生徒も多かった。 ○生徒アンケートの結果、長期休業中の課外は高い支持を得た。課外の目的と内容を明確にし、生徒の進路希望に即した取組としたことが成果につながった。 ○「笛吹グローバル」などの探究的な学びを通して地域社会への関心が高まり、高校3年間で実践してきた探究をふまえ、進学校においてさらに深めたいという生徒も多かった。	B	○少人数による習熟度別授業では、一定の成果が見られた。一方で、今後は生徒一人一人の学習意欲をさらに高めていくことが課題である。 ○生徒一人一人の進路意識や発達段階に応じた振り返りを大切にしながら、日常の進路指導と継続的につなげていくことが重要である。 ○後に向けて、限られた時間の中でも十分な対話を確保するとともに、担任間で懇談内容や支援方針に差が生じないように、情報共有や共通理解を大切にしていきたい。 ○「キャリアデザイン」につなげていくためにも、多様な外部団体と連携した学習機会を充実させ、多角的に物事を思考し、主体的に行動する生徒の育成につなげていく。 ○土曜講座や長期休業課外等は、生徒・保護者からの期待が大きい反面、部活動との両立もあり、運用面で課題がある。受講対象や目的をより明確にし、学習の質の充実を図る。 ○地域の関係機関や地域住民と連携したフィールドワークや課題解決型の実践を継続的に行うとともに、探究の成果を丁寧に振り返り、進路や次の学びへとつなげる仕組みの充実を図っていく。
4	これからの時代を生きる生徒に必要な資質・能力を育成する。(具体的な学習の場において、学んだことを積極的に生かし、他者と連携・協働しながら課題解決する力を育む)	◎生徒が地域の課題発見・解決に主体的に関わり、社会参画できる実践的な活動を行い成就感や自己肯定感を高める  ◎学校行事を通じ、地域社会の一員としての所属感や連帯感をさらに強く持てるよう育成する	・総合的な探究の時間の充実 ・学校運営協議会との連携による活動  ・生徒会活動の充実 ・広報活動の充実 ・笛吹市との包括連携による活動	○「笛吹グローバル」では、地域の方との対話を重視し、実際に地域に出て自ら課題にアプローチする姿が見られた。実際に、生徒の振り返りでは、フィールドワークを受け入れてくださった地域の方々から温かい言葉をかけられたこと、自分自身が地域の役に立たと実感する言葉が見られている。この実現には、学校運営協議会による、学校と地域の橋渡しが非常に大きな影響を与えていると考える。 ○地域住民と直接交流し、活動成果を発信する場が特定の教科等に、限定されたことは課題として残った。地域とつながる実践の機会を多角的に確保する必要がある。 ○学校運営協議会を活性化するために委員と生徒、教員を交えて「えんたくん」を使い、「学校の魅力化」についてワークショップを行い解決策の実践に務めた。	B	○「笛吹グローバル」では、一人一人の興味関心に応じた学びを大切にできた。この実践を持続可能なものにしていくためには、全教職員の探究に対する資質向上と、業務分担、円滑な情報共有を図る仕組み作りを進めていきたい。 ○生徒の興味・関心やこれまでの経験の違いにより、地域課題への主体的な関わり方には差が見られる。また、課題を自分事としてより深く捉え、活動を通じた達成感や自己肯定感を十分に実感できるよう、振り返りの充実が求められる。さらに、取組を継続的に進めていくためには、学校と地域が連携し、計画的かつ継続的に実践できる体制づくりを進めていくことが望まれる。
5	教職員の多忙化改善に向けた取り組みを行う	◎業務の平準化を図る ・会議等の効率化、行事・分掌の見直しを行う。  ◎部活指導の適正化を推進する ・年間指導計画に基づく、適正な部活指導を実施する。	・会議や行事の精選  ・部活動の実施状況と活性化	○マナーアップ運動の学年分散化や規模縮小を通して朝の時間外勤務を軽減した。 ○会議の時間設定を変更して、勤務時間内に終了できるよう工夫した。 ○今年度は部活動の指導体制の適正化を目的に、学校として二つの部活動の削減を行った。今後も生徒数は減少するので、持続可能な体制を確立するために、引き続き統合や外部資源の活用を進めながら、教育的効果を確保した活動の充実を図っていく。	B	○次年度は学校独自のマナーアップ運動に移行し、教職員の負担軽減につなげていきたい。 ○部活動は、外部指導者の確保や地域資源の活用について、連携体制の構築や予算面での検討をしていく。 ○生徒数の減少が進む中で、残っている部活動の活動水準を維持しつつ、生徒の学習や日常生活とのバランスをどのように取っていくかが課題となっている。

学校関係者評価	
実施日 (令和8年2月19日)	
評価	意見・要望等
4	○「笛吹グローバル」での探究活動や小中学校との連携をはじめ地域と密接に連携し、多様な取組を着実に推進している点を高く評価している。 ○「今未来手帳」については活用状況が低いことから、このことについてはICTなどの活用を模索しながら改善をする必要がある。 ○生徒減少における学科編成は学校の魅力向上に直結する重要な転換点である。公立高校の定員割れが進む中で、笛吹高校として明確な方向性を示す必要がある。また、高校無償化の影響で私学志向が強まる現状を踏まえ、公立としての価値や特色を打ち出すべきであり、編成方針は地域の期待に応えられるものであるべきで、県教委と連携しながら学校として生徒が魅力を感じられる体制を整えることが重要だ。 ○4学科を統合し、総合学科として編成し、時代に合った系列を構築してほしい。
3	○自己肯定感を高める教育の影響もあり、生徒が「間違えること」を極端に恐れ、否定される経験を避けようとする結果、対話や意見交換の中で本音を出せず、誤解が生まれやすい状況がある。特に、失敗を避けて「無難にやり過ごす」姿勢は、仲間との関係づくりにもマイナスに働き、相互理解や信頼関係の構築を妨げていると感じる。「対話の力」「その場で丁寧に関係を修復する力」「相手の立場に立つ思考」が今こそ必要であり、授業や学校生活のさまざまな場面で育てていくべき。 ○より良い人間関係を育むためには、生徒自身が自分の弱点を避けるのではなく、生徒が自分の力で問題に向き合い、失敗しながら成長できる機会を丁寧に設けることが重要である。個の尊重と公共性のバランスを育むため、協働活動や対話の機会を増やし、相手の立場を想像する指導を計画的に行ってほしい。 ○安心安全な学校づくりには、学校・家庭・行政・警察・地域の多面的な連携が不可欠であり、「ストレスマネジメント」等の講演会の実施は評価できる。
3	○ICT活用については、Classiのような学習支援ツールは、生徒の学習履歴や振り返りを記録し、自分の成長を可視化する点では非常に価値がある。 ○一般的に「教材提示が一律で生徒の習熟度の違いに十分対応できていない」、協働学習の場面でICTが効果的に使われていない」との具体的な課題もある。ICTは道具であり、目的に応じた活用方法が授業側に明確に設計されてこそ、生徒の個別最適な学びや主体的な協働につながるかと考える。 ○ICTツールで蓄積されるポートフォリオや学習履歴、日々の振り返りは、生徒自身の成長記録として機能するだけでなく、教員が生徒のつまずきや頑張りを把握するための大切な情報源となるとした。また、BLENDのように教員からの連絡や生徒の提出物、相談内容を一元的に扱えるツールは、保護者にとって「学校の様子が見える化される」安心感につながるため効果的に活用してほしい。
4	○地域の学校(小学校・中学校)との連携を密に、学生が教える出前授業や、一緒に活動するイベントやスポーツ等生徒の合同練習など地域に即した取り組みに加え、全国には、特色のある部活動等のPRにより募集に寄与できれば良いと思いたい。 ○探究活動等において、地域協働推進員の方々にも協力いただき、地域との連携を強化した。地域側には「高校生とつながりたい」という強いニーズがあり、学校・JA・地元団体が相談しながら柔軟に連携できる体制が重要である。 ○地域課題をグローバルな視点で捉え、企業や行政からの「依頼」を受けて市役所各課の専門性と連携しながら解決策を提案する受託型探究を通して、学校と地域をつなぐ実践的な学びを展開できるのではないかと考える。
3	○教員の業務量が依然として過大であり、授業後に部活動指導や保護者対応が続くことで、結局は運動後に事務作業を行わざるを得ない構造が深刻である。この状況では、教員が生徒と丁寧に向き合う余裕が失われ、学校の教育力にも影響する。「バックオフィスの役割」の強化や業務の分担、情報共有システムの整備などにより、教員が本来の教育活動に集中できる環境づくりが必要だと考える。

※※※ (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。  
(2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的な対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日は、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。